

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：23903
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2012～2015
 課題番号：24520666
 研究課題名(和文) 第2言語ライティング行動の長期的発達：ダイナミックシステム理論からのアプローチ

 研究課題名(英文) Longitudinal Changes in L1 and L2 Writing Abilities: A dynamic systems theory approach

 研究代表者
 佐々木 みゆき (Sasaki, Miyuki)

 名古屋市立大学・人文社会系研究科・教授

 研究者番号：60241147

 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本人学習者が3年半の観察期間で、どのように日英作文力を変化させるかと、その変化にどのような要因が最も影響力を持つかを調査したものである。参加者は、中級程度の英語力を持つ英語専攻の大学生22人であり、観察開始時は全員18歳だった。彼らは、4年間、年1回、一般英語力、日英作文力と、日英作文学習歴等に関する90分程度のインタビューを受けた。さらに大学4年次の最後には、自分の3年半のそれらの能力の変化についての30分程度のインタビューに答えた。分析の枠組みとしては当初予定したダイナミックシステム理論より包括的な生態学的アプローチを使い、4年間の変化での共通の傾向と個人差の両方を調査した。

研究成果の概要(英文)：This study describes changes in the L1 and L2 writing abilities of 22 Japanese students and asks what factors most critically impacted these changes over a 3.5-year observation period. The students were English majors with low- to mid-intermediate proficiency and aged 18 when the study began. They were observed at the beginning of their first year and in the middle of their second, third, and fourth years in university. Data included the students' scores on standardized L2 proficiency tests, L1 and L2 compositions rated by two independent writing specialists, and in-depth interviews about their beliefs about L1 and L2 writing and how and why their writing ability changed as it did over the period. The data analysis draws on Gaddis' (2002) historical-ecological perspective and explores the potential of "retrocasting" as a method for uncovering what critically impacted the participants' growth as multicompetent writers.

研究分野：応用言語学

キーワード：第二言語ライティング力 日本人英語学習者 多機能言語能力 質的研究 量的研究

1. 研究開始当初の背景

本研究者は、過去約20年にわたって日本人大学生の英語ライティング力や方略の研究をしてきた。第2言語産出プロセスの長期的変化を探る平成14年から19年まで継続した研究(科学研究費基盤研究C、No. 14560311とNo. 18520461)では、合計37名の日本人大学生が大学入学時からの3年半で、英語を書く力や書く方略や動機付けをどのように発達させていくかを観察・調査したが、環境からの外部要因は、被験者の長期的変化に大きく影響していた。成果は、応用言語学の分野では最も権威のある雑誌である *The Modern Language Journal*(2007)と *TESOL Quarterly* (2011)に発表することができた。本研究は、この研究を新たなデータで検証した研究(平成20年~23年度科学研究費基盤研究C、No. 20520533)のさらなる発展的研究である。

2. 研究の目的

当初、本研究は、日本人大学生の英語力、日英作文力、日英語のライティング知識や方略が、3年半の間にどのように変化し相互に影響しあうかを、応用言語学の分野で近年注目されている **Dynamic Systems Theory Approach(DST:ダイナミックシステム理論アプローチ)**の視点から明らかにすることを目的とした。人間の言語発達を「様々な要素が相互に関係しあい、直線的でない発達をとげる複雑なシステム」と捉える **DST**を研究枠とすることは、従来別々のものとされてきた第1言語と第2言語の作文力をひとつの「多機能言語能力」として観察するのに有効であると思われたからである。しかし、研究の途中から、**DST**の多くは、個人の独自の変化のみに注目し、同じような傾向を持つ個人の「傾向」や「共通性」に関心を向けないことがわかったため、本研究の最終分析では、より包括的な理論である「生態学的アプローチ」を採用し、個人の独自性と共通性のどちらにも注目した分析法を採用することとした。

3. 研究の方法

日本の中学・高校で6年間英語を勉強してきた大学1年生22人(当初25名を予定したが、4年間で3名が辞退した)に、設備のある研究室に個別に来てもらい、「英語力」、「日英作文力」、「日英作文方略」、「日英作文に関する知識」に関する量的データと、「書く事への動機づけ」や「『書く』とはどういうものか」と思っているかなどについての質的インタビューデータを、年一回の割合で3年半提供してもらった。それらのデータを元に「被験者の3年半の変化のプロフィール」を個人別を作り、大学4年次後半に被験者にそれを見せながら、「なぜ自分はそのように変化したと思うか」について「当事者としての

説明」をしてもらった。以上のデータのうち、量的部分は、既に分析が終わっており、一部の成果を国際学会で発表した(下記4参照)。しかし、合計22名分の日英作文方略に関するプロトコルデータの分析は膨大な時間を要するため、現在の時点ではまだ完結していない。

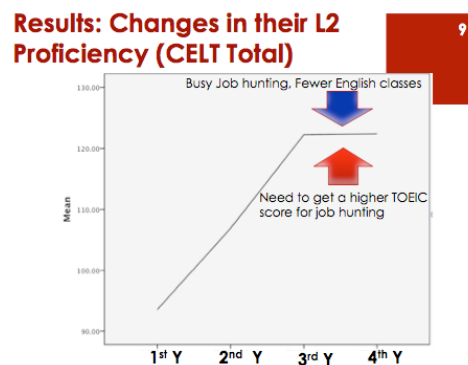
4. 研究成果

(1) 3に述べた理由から、本報告では、主に日英作文の関係について、以下の質問に答えた結果を述べる。

- A. 日本人英語学習者の日英の作文力が3年半の大学生活のうち、どのように変化するか。
- B. どのような要因がAの日英の作文力の変化に大きな影響力を持つか。
- C. Aの日英作文力の変化やBでみつかった外部要因と作文力との関係には個人に共通する傾向が見られたか。
- D. Aの日英作文力の変化やBでみつかった外部要因と作文力との関係には、個人独自のランダムな特徴が見られたか。

(2) (1)のためのデータは、3のように採取した。

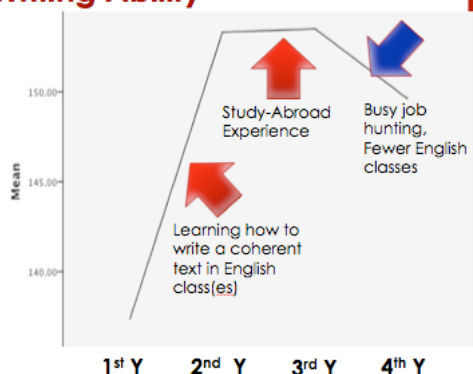
(3) 英作文は、それまでの似たような対象参加者に使用されてきた Jacobs et al. (1987)の作文評価基準を使い(それらの研究結果との比較のため)、日本語作文は、Sasaki & Hirose (1999)で本研究者が開発した日本語作文評価基準を使い、それぞれの作文の専門家2人に評価してもらった。評価者2人ずつの評価の相関(信頼性)は、概ね高かった(0.75-0.92)。英語力については、Comprehensive English Language Test Forms AとBをランダム順に使った。又、日英作文や英語力の変化への要因を探るため、毎年一人30分以上かけて行ったインタビュー結果の転記データを調査した。



(4) 英語力の変化は、以下のように、3年次がピークだった。参加者インタビューによると、英作文力向上には、1年次の英作文教育や2、3年次の留

学経験（22人中14人が2-11ヶ月の留学を経験）が貢献していた。

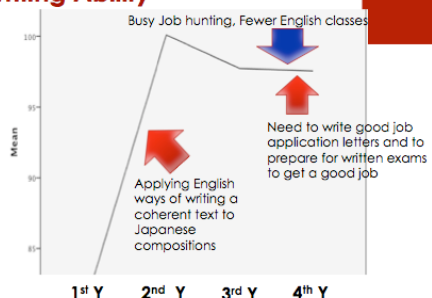
Results: Changes in their L2 Writing Ability



(5) 英作文力の変化は、以下のように2、3年次がピークだった。参加者のインタビューによると、英作文力向上に最も貢献したのは、1年次に受けた作文教育で、その後の留学経験も英作文力向上や維持に役立っていた。しかし、4年次になると英語の授業も極端に減り、就職活動に多くの時間を割かなければならなかったため、英作文力は減少した。

(6) 国語作文力の変化は、以下のように2年次がピークだった。

Results: Changes in their L1 Writing Ability



参加者インタビューによると、彼らは大学では国語作文の書き方は全く学ばなかったため、1年次に学んだ英作文の書き方をその後の国語作文の書き方に応用した学生が多かった。又、1年次に学んだ英作文の書き方は、「わかりやすいので、国語でも使える」と思ったためもあり、国語にも応用された。これらは、日英作文の採点基準が異なっていたにもかかわらず、参加者の国語作文力（特に構成力）向上に寄与した。4年次には、参加者は、日本語で就職活動のためのエントリーシート等を書かなければならなくなり、その練習が国語作文力維持

に貢献した。

(7) 以上のような日英作文力と英語力の関係の変化については、22人の参加者に以下のような3つの共通したパターンが見られた。

- I. 大学4年次に少し低下が見られたものの、観ね大学1年次より、日英作文力と英語力が概ね向上したグループ(6人)
- II. 留学により英語力と英作文力が大きく向上したが、国語作文力が1年次レベルより下がったグループ(8人)
- III. 英作文力や英語力も1年次より向上し、国語作文力が4年次にピークに達したグループ(5人)

さらに、これらのグループに属さない、独自の変化を遂げた参加者もいた。例えば、Ken（仮名）は、3年次に何らかの理由により外国人の友人が多くでき、毎日 Facebook で英語の書き込みを見るようになったことから英語力のみが向上した。このような個人的理由で、上記の I, II, III とは違う変化をした参加者は Ken を含めて3名だった。

(8) 以上の結果をまとめると以下の通りである。

- A. 日英の作文は4年間で、概ね相補的に発達した。
- B. Aの変化に強く影響を及ぼしたのは、明示的な授業、留学経験、就職活動と、人としての成熟だった。
- C. 日英の作文力と英語力の変化には、複数の参加者に共通の傾向があったが、独自の変化を遂げた個人も少数ながら存在した。

最後に、以上の結果から、作文に関する明示的な授業と頻繁な練習が作文力向上と維持に重要であることがわかる。

引用文献：

- ① Jacobs, H. L., Zinkgraf, S. A., Wormuth, D. R., Hartfiel, V. F., & Hughey, J. B. (1981). *Testing EFL composition: A practical approach*. Rowley, MA: Newbury House.
- ② Sasaki, M., & Hirose, K. (1999). Development of an analytic rating scale for Japanese L1 writing. *Language Testing*, 16, 457-478.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 佐々木 みゆき (2014) 「留学が第二言語ライティングに与える影響についての研究：回顧と展望」『第二言語としての日本語の習得研究』、査読有、17, pp.97-111.
- ② 佐々木みゆき (2013b). 「第2言語ライティング行動発達の研究方法を求めて：歴史

生態学的方法の可能性」『第24回第二言語習得研究会(JASLA)全国大会予稿集』、査読有、pp.112-117. 第二言語習得研究会.

[学会発表] (計12件)

- ①Sasaki, M. (2015, November). *Japanese students' longitudinal development in 2 writing strategy: A historical-ecological approach*. Symposium on Second Language Writing, Shandong University, Auckland, New Zealand.
- ②Sasaki, M. (2015, May). (招待講演). *Longitudinal development in L1 and L2 writing: An ecological approach*. Symposium on L2 Writing, OISE, University of Toronto.
- ③Sasaki, M. (2015, March). *Dynamic changes in the relationship between L1 and L2 writing abilities and L2 proficiency in Japanese multi-competent writers*. American Association for Applied Linguistics Annual Conference, Toronto.
- ④Sasaki, M. (2014a, March). *Longitudinal development of L1 and L2 writing in Japanese students: An Ecological approach*. American Association for Applied Linguistics Annual Conference, Portland, OR.
- ⑤佐々木みゆき(2014b, June). (招待講演). 第2言語ライティング研究:目の前の現象をどう捉えて、未来に生かすか. 第19回関西英語教育学会、関西学院大学
- ⑥佐々木みゆき(2014c, June). (招待講演). 第二言語ライティング能力の長期的発達:実証主義的アプローチと生態学のアプローチの接点. 竹内理氏と柳瀬陽介氏とのシンポジウム. 30回JACET中部支部大会、椋山女学園大学.
- ⑦Sasaki, M., Ross, S. J., & Kozaki, Y. (2014d, August). *Impacts of group motivational dynamics on Japanese students' EFL development*. International Conference on Motivational Dynamics and Second Language Acquisition. University of Nottingham, Nottingham.
- ⑧Sasaki, M. (2013a, March). Reexamining writing assessment rubrics in the classroom. Colloquium presented with Paul Kei Matsuda, Lia Plakans, Deborah Crusan, Jill Jeffery. Annual Convention of Teachers of English to Speakers of Other Languages (TESOL), Dallas, Texas.
- ⑨Sasaki, M. (2013b, October). (基調講演) *English writing instruction in senior*

high schools in Japan: Its goals, its product, and its future. Symposium on Second Language Writing, Shandong University, Shandong, China.

- ⑩Sasaki, M. (2013c, November). (基調講演) *Development of Japanese Students as Multicompetent Writers: An Ecological Perspective*. International Symposium on EFL Writing in East Asia: Crossing the Borders. Chiba, Japan.
- ⑪佐々木みゆき(2013d, November). (招待講演) 『全入時代の高校3年生の英語ライティング力:どこまで書けるのか、書ければ良いのか』第11回英語教育改革フォーラム. 東京国際大学.
- ⑫佐々木みゆき(2013e, December) (基調講演). 「第2言語ライティング行動発達の研究方法を求めて:歴史生態学的方法の可能性」第24回第二言語習得研究会(JASLA)全国大会. 広島大学.

[図書] (計4件)

- ①Sasaki, M. (印刷中). *English writing instruction in senior high schools: A historical ecological approach*. In Silva, T., Wang, J., Paiz, J. & Zhang, C. (Eds). *L2 writing in the global context: Represented, underrepresented, and unrepresented voices*. Beijing: Foreign Language Teaching and Research Press.
- ②Sasaki, M. (in press). *Asian perspectives on second language writing pedagogy*. In J. I. Liantas (Ed.). *The TESOL Encyclopedia of English Language Teaching*. NJ: John Wiley & Sons.
- ③Sasaki, M. (印刷中). *L2 writers in study-abroad contexts*, Chapter 8. In R. Manchón, and P. K. Matsuda (Eds.), *The Handbook of Second and Foreign Language Writing*. Berlin: De Gruyter Mouton.
- ④Sasaki, M. (2013). *Introspective methods*, Chapter 79 (pp. 1-18) of Volume III: Evaluation, methodology, and interdisciplinary themes. In A. J. Kunnan (Ed.), *The Companion to Language Assessment*. Malden, MA: Wiley-Blackwell.

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称:

発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木みゆき (SASAKI, Miyuki)
名古屋市立大学・人間文化研究科・教授
研究者番号：60241147

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：